

専管ふすまの生産と流通状況

畜産課

畜産の振興にともなって、飼料の需要量も急速に増大し、全国の濃厚飼料消費量は、昭和30年度に520万トンであったものが35年度には770万トンに、更に37年度には1,055万トン、と大巾な需要増加が見込まれています。このようなばく大な濃厚飼料消費の内訳を見てもみますと、35年度では総量770万トン、うち糟糖類が約290万トン、穀類287万トン、動植物油粕類等90万トン、いも類75万トン、その他28万トンで、糟糖類、穀類を合わせると全体の75%を占め、この両者の消費量はほぼ等しくなっています。さらに糟糖類のうちでもいろいろの点で飼料の基準とされるふすまについては、その約40%を占めており最も高いウエイトをもっています。

ところで安定した畜産経営をすすめるためには、飼料価格が安定したものでなければなりません、農林省ではさる32年間飼料価格の急騰の際、緊急対策として飼料需給安定法に基づいて、33年度から専門工場を指定して、ここで輸入小麦を加工してふすまの増産をはかるいわゆる専管ふすまの制度を実施してきました。

専管ふすまの制度

農林省ではいちじるしく需要の増加してきたふすまの需給と価格の安定をはかるために、多額の財政負担をして外国産のふすまの輸入を行い飼料事情の緩和をはかっています。一方積極的に国内での増産を行うために、主にカナダ・アメリカ等の等外の小麦を輸入しこれを特定の認可工場に依託加工の形式で麩を生産させ、安価な指定価格によって末端需要家にまで行届かせることにしています。つまり従来のように製粉工場のふすまの増産では急には十分な効果は望めない、特定の製粉工場を決めてふすま製造を専業とさせることにしたわけで、生産に關しての数量、経費、価格等は報告制になっています。これが昭和33年に制定発足したいわゆる飼料小麦加工専門工場制度です。現在全国で24工場が指定されています。

つまり専管ふすまとは、いろいろな条件を付して

政府が監督管理する指定専門工場でふすまを増産し、これを指定需要者団体（別掲）を通じて末端利用者に配給するものをいうわけです。

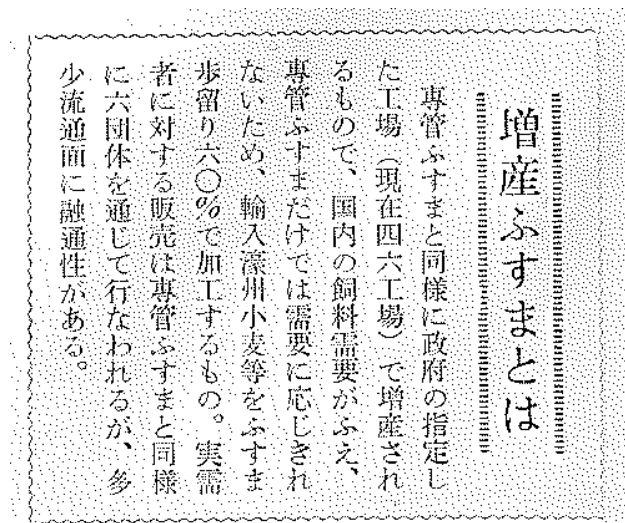
専管ふすまには次のような条件が付けられています。

ふすまの買受対象団体

全国購買農業協同組合連合会	(全購連)
日本養鶏農業協同組合連合会	(日鶏連)
全国畜産	〃 (全畜連)
全国酪	〃 (全酪連)
全国開拓	〃 (全開連)
協同組合日本飼料保税工場会	(保税工場会)

原料小麦と専管ふすまの歩留り

原料はカナダ又はアメリカ小麦の単独挽砕で、普通の製粉工場のふすま歩留りが30%前後であるのに対して、専管ふすま60%と特に定められています。



生産ふすまの検定

品質についてはその水分、粒度、外観について農林省の定めた規格にもとづいて日本穀物検定協会の専任検定員が検定して、毎個に検定済みの票箋がつけられます。水分の規格は原料小麦の水分が多いので、5月から9月までは14.5%、10月から4月までは15%（アメリカ小麦の場合は0.5%低い）となっています。また生産と出庫の数量も検定されます。

包装および荷姿

専管ふすまの包装容器は、農林省の指示による新

岡山畜産便り 1962.06

スフ袋 (30 kg入) と新紙袋 (15 kg入り) に限定されています。36 年度の実績では、スフ袋のもの 45%、紙袋のもの 55%の生産割合になっています。荷姿は袋の表面に「専管ふすま」(朱色印刷) と「工場置場渡価格」が表示されます。包装費用は販売指示価格に含まれます。

販売価格 (指示価格)

農林省は工場に対して、毎月 1 回原料小麦売却の都度、それから生産されるふすまについて、新フツ袋 30 kg と紙袋 15 kg 入り別に工場置場渡価格の指示を行います。工場はその価格で前記団体に販売します。

(表 1) 一般ふすまと専管ふすま価格の比較 (単位円)

		36	1	2	3	4	5	6	7
一般ふすま相場 (紙袋30kg)	大阪	724	745	766	775	746	632	630	
専管ふすま 指示価格	スフ袋 (30kg)	617	617	(647)	(647)	618	618	618	
	紙袋 (30kg)	600	600	(630)	(630)	602	604	604	
8	9	10	11	12	37.1	2	3	4	
635	651	695	732	744	756	750	728	719	
618	618	618	618	618	618	618	618	637	
604	604	604	604	604	604	604	604	622	

(表 2) 専管ふすま生産状況

年度	工場数	農林省計画	加工	達成率	ふすま 生産量	同伸 長率
		トン	トン	%	トン	%
33	6~11	180,000	78,490	42	45,293	100
34	12	192,000	177,526	89	102,462	226
35	12~22	270,000	261,572	95	154,536	341
36	22	396,000	332,091	84	207,212	457

(注) 飼料小麦専門工場会資料による。

(注) 飼料小麦専門工場会資料による。

- (1) 価格は工場置場渡し。
- (2) 一般相場は各月の上中下旬価格の平均とした。
- (3) 専管ふすま指示価格のうち () 内はふすま歩留り80%のもの。

(表 3) 専管ふすまの団体別販売状況 (36年度)

	販売数 (全国)	前年度販売数 に対する比率	地区別 出荷(販売)量					
			岡山	広島	山口	島根	鳥取	
販売総数	207,102	100.0	135.3	7,309	6,855	1,556	1,325	2,974
全購連	79,504	38.4	139.1	805	3,740	242	785	2,769
日鷄連	21,480	10.4	115.9	765	6	772	—	—
全畜連	27,853	13.5	124.2	2,429	341	210	345	90
全酪連	22,670	10.9	158.7	1,336	538	332	165	115
全開連	9,162	4.4	262.1	60	325	—	30	—
保税工場会	46,433	22.4	122.1	1,914	1,905	—	—	—

(表 6) ふすまの国内生産と輸入ふすまの売却(出荷)状況

年度	ふすま 総数	国内生産			輸入ふすま 売却実績
		一般ふすま	専管ふすま	増産ふすま	
33	755,082	587,487	44,247	16,204	107,144
	100.0%	77.8%	5.9%	2.1%	14.2%
34	882,239	599,884	102,462	24,614	155,279
	100.0%	68.0%	11.6%	2.8%	17.6%
35	1,067,623	621,080	154,536	84,239	207,768
	100.0%	58.2%	14.5%	7.9%	19.4%
36	1,161,776	633,747	207,211	158,099	162,719
	100.0%	54.6%	17.8%	13.6%	14.0%

資料：飼料小麦専門工場会

(表 5) 専管ふすまの飼料配合向割合

	契約量	内配合(工場)向		配合向割合	
		トン	トン	%	%
全購連	78,300	12,072	20	15	
日鷄連	21,090	378	1	2	
全畜連	27,365	0	—	—	
全酪連	22,295	1,250	2	7	
全開連	8,867	747	1	8	
保税工場会	45,471	45,471	76	100	
合計	203,388	59,918	100	29	

(表 4) 専管ふすまの組成と普通ふすまとの比較

	水分	粗蛋白質	粗脂肪	可溶無窒素物	粗繊維	粗灰分
	%	%	%	%	%	%
専管フスマ(試料 1)	12.9	15.3	3.0	63.6	3.0	2.2
〃 (〃 2)	14.0	14.1	2.5	65.9	3.3	2.2
〃 (〃 3)	14.6	14.8	3.0	62.7	2.6	2.3
普通フスマ	13.5	15.9	3.6	53.2	8.3	5.5
原料小麦	14.0	13.2	1.8	—	2.0	1.4

飼料小麦専門工場会資料より

(注) 実際の販売実績より若干日数ズレあり。

畜産の研究 36.9 (農技研 窪田大作) より

岡山畜産便り 1962.06

昨年度の月別の価格は（表1）のように、年間1本価格スフ袋（30 kg）618円、紙袋（30 kg）604円であったのに対し、一般ふすま価格は、大阪相場で、4月の紙袋入り775円を最高に、7月652円の最低とかなりの差をみせています。

36年度の生産出荷の概況

36年度の生産実績は約20万トンで、前年度を5万トン上回ってはいますが当初の農林省計画に対しては84%とやや低調な生産状況となっています。（表2）、計画量に達しなかったのは、業者に短期間に多量の増産が要請され、資金操作その他に無理ができたこと、生産小麦粉の安価などが原因しているようです。

また36年度の専門工場から販売されるふすまの各指定団体に対する出庫の状況、団体から地区別に出荷された実績は（表3）のとおりで、中国地区では岡山県が最も多くなっています。

専管ふすまに飼料価値

専管ふすまは、ふすま歩留りが60%であるため、従来のふすまに比較して澱粉質が多く含まれているのが特徴です。科学的組成を比較すると（表4）のとおりで、普通ふすまに比較して可溶性無窒素物の割合が多く、反対に粗蛋白質、粗脂肪、粗繊維、粗灰分の割合が少なくなっています。見方によってはふすまと普通小麦を混合したようなものといえます。したがって普通ふすまより粗蛋白質含量が若干少なく、エネルギー含量が高いものとして用いれば、乳牛には勿論、その他の家畜、家禽に対しても有効とされています。また養鶏飼料としては、粗繊維の含量が少なくエネルギーとして利用できる可溶無窒素物が多いことから飼料価値が高いわけで、普通ふすまより有効といえるようです。

配合飼料向量

次に36年度中の指定団体が工場から購入（売買契約締結）した専管ふすまのうち、国の承認を受けて配合用飼料にまわした量は5万9,600トン、総契約量の29%となっています。このうち全購連と保税工場会で96%をしめています。

ふすまの供給状況

なお参考までにふすまの国内生産と輸入の状況をみてみますと、まず総供給量では、需要の増加にもなって33年度の75万トンが36年度には116万トンと増加しており、その内訳でも国内生産、輸入とも逐増の傾向にあります。しかしふすま総量のうちに占める割合からみると、国内で生産されるもののうち一般ふすまは次第に比重が減少し、専管ふすまと増産ふすまの割合がふえてきているのが目立ち、36年度では両方でやく31%（36万トン）になっています。またふすまで輸入されたものを合わせると全体の45%を輸入ものにたよっていることになるわけです。